

ヒルトンアンプを上手に使いこなすために:

尾崎 隆敏

マイクロホン

常にマイクロホンに近づいて使い、2センチ以上は離さない。できるだけ真っ直ぐ前で唇に近づけ、マイクの中に声を投げ込むようにコールするのではなく、マイクを飛び越して向こう側に声が届くように発声する。声の力や効率が半分になるようですがこれで十分なのです。同じようなことがワイヤレスマイクロホンにも言えます。マイクロホンは唇に近く使う程声の再生性能が上がり、フィードバック(ハウリング)の危険率も低くなります。

声と音楽のバランス

動作の指示をダンサーに徹底するため声は音楽を超えてははっきりと出て来なければなりません。音楽を上げ過ぎて、コーラーの声が音楽に埋もれてしまい、声を大きくとダンサーにいわれることがよくあります。声が良く届くようなホールでは声の大きさが小さく、音楽も比較的小さいのが良いのです。一般的にはホールが大きくなって反響がひどくなると、声を音楽からはっきりと際立たせてダンサーがコールをよく聴けるようにする必要があります。誰か信頼のおける人に声と音楽のバランスをダンサーの位置でしっかりと聴いてもらう必要があります。

フィードバック(いわゆるハウリング)

フィードバックはスピーカーから大きな音が出て、その音がまたマイクロホンで拾われ、アンプ、スピーカーと一巡した時に起こります。殆どマイクテクニックの悪さに起因します。マイクを遠く離して使っているためアンプの出力を上げなければならぬからです。スピーカーに近過ぎる場合も起こります。

音質(低、中、高音)の調整

音響的に優れているホールでは音質を極限まで調整することが可能ですが、反響の多いホールなどでは声と音楽のバランスを調整するばかりでなく、声と音楽の音質また音量(ヴォリューム)もしっかりと調整しなければならない。音楽の音量を少なくし、過度の低音部分を取り除き、高音部も少しカットしてコーラーの声の高音成分を際立たせる。AC-201には中音コントロールがあるので調整範囲が広くなり対応し易い。そしてマイクの音質調整で高音部を上げて声を音楽の上に乗せる。この調整により自分の好みの音とはかけ離れるが、全体の幸せを考えるべきである。AC-300Cではグラフィックイコライザーなどの追加もマイク-1とレコードチャンネルで可能なので、かなり幅広く調整でき、フィードバックにも有効となる。

スピーカーの位置

当りながら全てのフロアに音が行き届くのが良い。後ろで踊るダンサーが気持ちよく踊れて、前で踊るダンサーにはうるさくないようにスピーカーの位置を充分高くする。スピーカーは高く掲げその角度を音のビームがホール一番後ろの床を狙うように配置する。スピーカーはできるだけ自分の近くに置き、上記声と音楽のバランスに注意を払う。この時フィードバックには充分注意する。スピーカーは決して平らな堅い壁に直接向けて配置してはいけない。音が遅延して自分に跳ね返り、大変コールし難くなります。この場合は思い切ってスピーカーを傾け、後部で踊るダンサーに向けて配置します。また、スピーカーを汎用接続する必要がある場合はインピーダンスに気をつけ、必ず4オーム以上でメインまたはモニターに接続して下さい。この時メイン、モニターとも差し込みが2個づつありますので注意して下さい。この2個の差し込みは並列に接続されています。どちらか一つからスピーカーへ結線するようお勧めします。次ページに結線例を示します。

→差し込み口は2つあるが、中で並列になっているので、2つからはスピーカーをつながないこと。

アンプのスイッチ・オン

①スピーカーをスタンドに乗せスピーカーコードを差し込み、他端をアンプのスピーカージャックの一つに差し込む。②ターンテーブルの回転調整レバーがオフに、音楽とマイクボリュームが最少になっていることを確認し、マイクケーブルを差し込む。③電源コードをアンプに差し込んでから他端を壁の差し込みへ入れる。④アンプのスイッチをオンにする。

→電源は、結線後にする習慣を!

アンプのスイッチ・オフ

①ターンテーブルの回転調整レバーをオフに、音楽とマイクボリュームを最少にする。②アンプのスイッチをオフにする。③接続しているコード類を外す。